



平成21年3月16日
卓話『なぜ木で家を作るのでしょうか』
中村外二工務店 代表
中村 義明 様



中村でございます。宜しくお願いいたします。京都から参りました。東京でも仕事を幾つかやっております。今は羽田空港の国際ターミナルに1260坪ほどの江戸の町を作っております。なるべくほんまもんで江戸を見せたいと考えて、それを表現する町並みを作っています。

うちの親父はよく木には別々の温度があるって言ったんです。ケヤキみたいに堅い木は冷たいけど栗とか杉とか柔らかい木はあったかい。それを使い分けることは大変難しい。今日もこのホテルに参りましてトイレへ行きますと皆黒御影で光ってますね。すべるようになっている。あれは非常に緊張するんです。あれを加工して滑らないような感じにすると、もっとやわらぐんです。日本という国は和をもって尊しというくらい和が大事なんですね。それがやはり日本人の一番大事なとこやと思います。

海外の人と喋っている中で、やはり日本のことをちゃんと喋れんと海外では戦えない。よく商社の出張員が来ますけど、彼らはお茶もお花も、何も日本の文化を知らない。海外に行って失敗するのはそこにあるわけです。数寄屋がどこからきたかという書院建築からです。書院建築は寝殿造りからきた。そのベースにあるのは全部宗教です。寝殿造りのベースは密教。密教を勉強すれば草木国土悉皆浄土、石にも木にも命があるという。これはすごい日本では大事なことで、それがお茶室のベースになっています。寝殿造りの後、鎌倉、室町が禅宗の文化で現れる。大量の武士ができて大量生産の建物が要るわけです。それが書院造りで、材料も白木作りの四角い柱になり、壁は漆喰塗り。そういうどこにでもあるもの、どこでもできる加工品を使うことが書院建築の一番大事な大量生産のベース。でも世の中は今と一緒に行き過ぎると変わります。そこで出てきたのが村田珠光であり千利休です。それは小さくてもいい、大ききさじゃな

いっていいこと。それと共に材料が全部変わります。四角い柱から丸い柱。壁は漆喰から土っていうように。そういう中で数寄屋建築はできてくるわけです。

松下幸之助さんはお茶室だけでも18ほどやりました。北の中尊寺から南は和歌山城までお茶室を寄付して広めた方ですけど、その方が何故40のときに茶室を作ったか。茶室というのは非常に狭い空間。これはね、実はその頃松下は住友さんからお金を借りたかったわけです。で、彼はそのお茶室で頼んだ。「広い部屋で頼んでも断られるから狭い茶室がええんや」というのが彼の論法です。

日本の文化ってすごく面白い。徒然草に、ものの整いすぎることは悪しきことって書いてある。面白いですねこれ。建築でも、だから「抜かす」という。我々職人も、うまいやつには手を抜けと言うんです。ちょっと抜くことがすごくいいんです。

私自身、今も海外で仕事を幾つかやらせていただいております。ただ日本のものを持っていった単なるオリエンタル趣味ではない本当の芸術品。いいものっていうのは世界共通です。今は料理屋が一生懸命努力して世界に日本の料理を発信しています。日本の食が世界に価値観を生んだように、私も建築をやっていきいたいと思っています。

皆さんもぜひ日本を知っていただいて、それを見て触って五感で感じてほしい。昔よく師匠に、説明するなって怒られました。建築も自分の目で見てほしい。私も自分の目で見てやりたいと思います。